市芦救援会通信

市芦救援会通信　通巻１０７号　０１／０７　＜１部１００円＞　発行人　玉本　格
市　芦　救　援　会　〒 659-0001　芦屋市剣谷９　市芦分会気付　0797（３２）１１３１
市芦反弾圧闘争を支援する会　〒 650-0022　神戸市中央区元町通５－３－１６　テーラービル３Ｆ

芦屋市議会でも教育委員会を追及
続けられる「市芦の存続を求める」街頭署名と街頭宣伝

「中身も検討せずに答申を最大限尊重するというのは教育委員会として無責任ではないか」「教育改革というがこれまでの同和教育をどこでどのように総括しているのか」「これまでの二回の学教審答申が成果を上げなかったのは、答申が市芦の生徒実態にあっていなかったからではないのか」「市芦廃校という重大な答申がなぜ市民に隠れた場所でなされなければならないのか」「私も進学保障生として市芦に入学した。第一七回生として卒業したが、途中中退しようと悩んで学校を休んだ時期もあった。そんなとき教師が家を尋ねてきていろいろ話を聞いてくれた。クラスの仲間や解放運動の仲間に支えられながら卒業まで頑張りきった。教育改革後、以前のような取り組みはどうなっているのか」「教育改革が失敗したのは、市芦高校に通う生徒や芦屋市民が、一人ひとりを大切にする同和教育を必要としていたからではないのか」「教育を受ける権利が奪われてきた多くの生徒が、そして市民が市芦を必要と求めてきた。そして差別を背負って生きている子や経済的にしんどい家庭の子や学力的に大変な子を一人ひとり大切にする教育、市芦高校に通ってくる全ての子どもたちの教育が保障されることを願って先生たちは頑張っていた。全てがうまくいっていたわけではもちろんない。でもこの同和教育が推進されていた時期に市芦に通っていた多くの生徒は、自分が一人の人間として大切に扱われ、そして頑張る課題を教師とともにまた仲間とともに見つけていけた」

芦屋市議会一般質問で、市芦出身の山口みさえ市会議員の三浦教育長への追及がなされた。しかし、三浦教育長は市芦の生徒と教師への愚弄と「教育改革」の失敗の教師への責任転嫁で応えた。市芦分会は、現在、三浦教育長に文書で抗議し、発言に対する釈明を求めている。

も／く／じ　　市芦救援会ホームページ　http://homepage1.nifty.com/i-kyuenkai/
Ｅメールアドレス　i-kyuenkai@nifty.com

芦屋市議会でも教育委員会を追及・・・・・・・・・・・・救援会事務局・・・ 1
三浦教育長発言に抗議し釈明を求める・・・・・・・・・・市芦分会・・・・・ 2
市芦高校を存続させてほしい・・・・・・・・・・・・・３４回卒業生 深田義和 3
おとんのぶんまで生きる・・・・・・・・・・・・・・・１３回卒業生 M･T・・ 5
市芦否定は僕の生き方自体も否定されること・・・・１３回卒業生 M･T・・ 9
神戸の夜間高校「統廃合反対」怒りの署名を提出・・・・・・・・・・・・・・ 9
［芦屋市助役汚職事件･公判傍聴記］汚職で汚染された北村市長の側近たち ・12
今後の日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

三浦教育長発言に抗議し釈明を求める

兵高教阪神支部市芦分会

二〇〇一年七月一〇日の市議会一般質問での山口みさえ議員の質問に対して、三浦教育長より下記のような答弁があった。

1　中退者に対する指導は十分なされていたのか、との質問に対して

「答申にもあり、私どもの判断でも、教師の指導や指導体制に問題があった。私が教育長になってから何人かの校長が替わったが、もっと家庭訪問や進路指導を丁寧にするよう指導したが、ならなかった。教師の中で意思統一がなされなかったと聞いている。」

2　第一次、第二次「教育改革」が失敗したのは実態にそぐわなかったからではないのか、との質問に対して、根拠も明らかにしないまま、

「そうは思わない」

と答えた上で話をすり替えて

「一〇数年前に芦屋に来てすぐに市芦へ行った。確かに全国的に教育が荒廃した時期であったし、他市でそうした経験もあった。しかし、私は、それまでに数多くの学校を見て回って経験があるが、市芦ほど荒廃した学校をこれまで見たことがなかった。だから私は教育長になってから一刻も早く、生徒の学力を高める、個性を尊重する、道徳性の問題など建学の精神こそ市芦改革の大きな目標として努めてきたが実行に至らなかった。」

中退者の指導に関しては、山口みさえ議員より市芦卒業生としての自らの経験も述べながら、「教育改革」前の市芦の生徒への指導は、不登校生への指導、あるいはやむなく退学に至った場合においても事後の指導が極めて丁寧になされてきたとの指摘がなされた上で、「教育改革」後の生徒への指導が問われたものである。

それに対し、三浦教育長は全ての責任を教師に押しつけた。

「教育改革」後、校長に「家庭訪問は不必要。高校は学校に来た生徒を指導するところ」といわせたのは芦屋市教育委員会であった。そして、出席や遅刻の数字をあげ、規則のみを前面に押し立てた生徒管理を推進し、「欠席日数が超えたからお前はもう進級できない」との一言で生徒を不登校・退学へと追い込んでいったのは、教育委員会の指示を受けた学校長と学校長により任命された分掌体制であった。

さらにいえば、職員会議を校長の意思伝達機関として形骸化し、教員が生徒の指導をめぐってそれぞれの立場から発言し、議論し、意思統一し、一致して取り組む学校体制を破壊したのも教育委員会であった。

「教育改革」により市芦にあった生徒と教師の信頼関係や人間的なぬくもりといったものを根こそぎ破壊したのは教育委員会であった。当時、学校教育課長として市芦の教育破壊に三浦教育長も手を染めていたのであり、自ら何をしたのかも明らかにしなければならない。

学校長をほぼ二年おきに交代させ、新任教員を大量に採用し、しかも三～五年で転出させて、市芦を管理職と新任教員の練習場所と化し、生徒に多大な不利益を与えたのは教育委員会自身である。

こうした事実を無視もしくは歪曲し、生徒指導の不十分さを全て教員に押しつけることを私たちは絶対に許すわけには行かない。

また、「当時市芦ほど荒廃した学校をこれまで見たことがなかった。」「建学の精神こそ市芦改革の大きな目標として努めてきたが実行に至らなかった。」と市芦とそこに生活した生徒と教師を愚弄しその存在を全面否定するが、三浦教育長はどれほどの学校を見、市芦についてどれほどのことを認識して前記発言に至ったのか、市芦のどこが建学の精神に反

していたのか、一切の根拠が示されていない。当時、市芦をはじめとして定時制・通信制など教育の底辺を支えていた高校でどれほどの生徒と教員の格闘があったか、三浦教育長の目には全く入っていない。もしくはそのような格闘を正確に見据える感性が欠如していたというべきであろうか。

以上の観点に立って下記のことを要求する。

記

早急に話し合いの場を設定し、三浦教育長本人が私たちに前記発言の根拠を示し、発言に関する釈明をすること。

以上

七月二日、阪神芦屋駅で街頭署名

六月一日に続き七月二日に阪神芦屋駅前で、「市芦があって何が悪いねん！市民の会」による街頭署名と街頭宣伝が行われた。引き続き九月七日にもＪＲ芦屋駅前で街頭署名活動が予定されている。

三四回生の深田君が激励のＥメールをくれました。神戸から市芦高校に通った生徒ですが、神戸や芦屋に限らず、拠り所となる学校が必要とされていることを訴える文章を投稿してくれました。

［寄稿］

かけがいのない一時期を過ごす
公立高校の門戸開放を！
…市芦高校を存続させてほしい…

三四回卒業生　深田　義和

不安！行く高校がない

私と市芦の出会いは、かれこれ七年くらい前にさかのぼります。当時、中学三年生だった私は進路選択を前に悩んでいました。なぜなら、私は勉強が全然できず、中学の担任の先生からも「公立の高校への進学は絶望的だ」と言われていました。

私は、今まで努力してこなかった自分の自業自得やから高校へ行かれへんかったら働くしかないなあと半分あきらめた気持ちで日々を過ごしていました。

そんなとき、担任の先生から職員室に呼ばれ緊張しながら入室しました。先生は、「市芦という学校が神戸の隣の芦屋市にあるのだけど受験してみてはどうか？」と言って

くれました。その後に、先生は、「入学してからとまどったらあかんから、先に教えとくけど、昔は荒れていたけど今はだいぶ落ち着いているらしい」と教えてくれました。私は、一瞬不安な気持ちになりましたが、やるだけやってみるかと受験することを決めました。その時、すでに中学三年生の夏休みが目前に迫っていました。

今まで、私は勉強は全くと言っていいほどしておらず遊んでばかりいましたが、市芦を受験することになってからは両親に塾に通わせてもらったり家庭教師をつけてもらって一生懸命勉強しました。塾や家庭教師については、当時は全然考える余裕がありませんでしたが、その後、父が長年勤務していた会社をリストラされ今になってはすごい負担をかけていたと思います。。

しかし、基礎学力ができていないためか全然成績が良くならないまま受験の日を迎えました。結果は、合格して何とか入学させてもらうことが出来ました。私学も何校か受験しましたが最終的に合格できたのは市芦だけだったのです。合格した喜びより、不安と「また、学校にいけるんだなあ」というぼんやりした気持ちの方が強かったように思います。

貴重だった高校生としての日々

市芦に入学してしばらくは友だちができず、ただ授業を受けて帰るという日々が続きました。しばらくして少しずつクラスの人と話をしたりできるようになり、友だちと呼べるような子も何人かできてきました。（中略）

そうしているうちに1年間が過ぎ、二年生に進級することができました。そんなある日、クラスで仲良くしていたM君が突然学校に来なくなりました。M君は、市芦入学と同時に休みの日には引越センターなどでアルバイトしていたのですが、学校よりアルバイトの方が楽じくなったようでした。私や他の友だちもとても心配していましたがどうすることもできず、ただ時間がもどかしく流れていきました。

そんなある日、担任のY先生がM君の自宅を家庭訪問してくれ、翌日、M君は約一ヶ月ぶりに学校に姿を現して、それからは毎日学校に来るようになり、私もこのとき自分のことのようにうれしい気持ちでした。後に、M君にアルバイトをしていたときのことを尋ねると、「その時は学校よりもアルバイトをした方が夢に近づけるような気がした」と話してくれました。彼は、その時は学校よりもバイトのほうが大切だと思っていたようです。

（中略）

三年生になると、市芦卒業後の進路を決めなければなりません。私はこのとき、将来のことなど全然考えていなかったので、「とりあえず働かなあかんなあ」と思い、就職を選びました。今から考えると、高校生活が楽しくて「できればずっと高校生でいたいな～」という気持ちが正直な気持ちだったように思います。しかし、いつまでも現実逃避しているわけにも行かないので試験勉強することにしました。

私の受験する会社は面接試験と筆記試験がありました。特に面接試験は全く初めての経験だったので、練習でも返答にいきづまり黙り込んでしまうことも度々でした。模擬筆記試験も一般的な常識問題がわからずとても苦労しました。そして、試験日がきて、受験会場に行くとすでにたくさんの受験者が来ていました。私は、「今回はかなり難しいなあ」と思いながら試験に臨みました。結果は、残念ながら不合格でした。しばらく悩んでいると、担任のY先生が、「職業安定所から未補充の求人票が来ているから見に来なさい」と言ってくれました。そこから選んだ一つの会社を受験し、一一月の終わり頃、何とか内定をいただくことができ無事卒業することができました。

私は市芦卒業後、入社した会社を人間関係がうまくいかず退職して、その後、契約社員やアルバイトとして工場作業員や警備員や新聞配達員など職を転々としましたが、どれも職場でいじめや差別を受け現在フリーター（求職中）にいたっております。やはり、社会人になるといじめや自分の力ではどうにもならないことがたくさんあるんだなあ

とつくづく感じております。

かけがいのない一時期を過ごす場所として市芦高校の存続を！

先日市芦時代の同級生とクラス会をした席で、「市芦が存続の危機にひんしている」ことを知り、市芦に助けられた者として少しでも恩返ししたいと思い筆を執らせていただきました。確かに、市芦は有名大学進学率を誇ったりスポーツで実績をあげて有名校になることはどう努力してもできませんが、勉強が出来ない子にも高校に進学するチャンスを与えてあげてください。

最初は、前はかなり荒れていた学校だと中学の担任の先生に言われていたので不安な気持ちでいっぱいでした。でも、入学してみるととても楽しく、かけがえのない思い出と友達ができてとても素晴らしい、学校生活でした。市芦に入学して良かったのは、たくさんのかけがえのない思い出はもちろん人間の本質は、見かけ（髪の毛を染めているとか身なりや言葉使い）などでは絶対に判断出来ないんだなということを知ったことです。以前は、茶髪の人をみたら恐いなとか近寄り難いなという気持ちでした。また、市芦の子は自分のことだけでなく他人のことも思いやれる子が多いなあと感じました。社会人になると他人をだましたり陥れて自己の利益を得ようとする人が多いと感じています。

市芦を卒業してからまもなく4年が過ぎようとしていますが、市芦時代の友達とは近況を語りあったり遊んだりしております。私は、人間教育の場として市芦を何とか存続させてほしいと強く願っています。かつての私のように何となく入学してきた子も、市芦で三年間を過ごし、新しい友だちを見つけたり市芦卒業後の新たな目標を見つけられ、喜んで卒業して行かれること心から確信しております。

社会人になると人間関係を作っていくにも利害を考えなければならず苦しいことが多いな～とつくづく感じております。誰にとっても、高校時代のような楽しく飾らずに自分自身でいられる時期は、後にも先にもないのではないかなあ？と最近考えております。この先どうなるのかわかりませんが少しでも長く市芦が存続され、社会に出る前に、かけがえのない一時期を過ごす機会を少しでもたくさんの子に門戸を開放してあげてほしいと切に願います。最後に、二年生のときに学校に一時来なくなっていたMくんも一緒に卒業できたことを大変うれしく思っております。

［市芦救援会ホームページにも掲載］

市立芦屋高校の内実を形作った生徒たちの言葉

・・・生活を抱え込んで登校する生徒たちの拡闘。その中で彼らは、一瞬、確実に人生を輝かせた・・・

教育弾圧によってどのように学校を変えようとも、そこで起こった生徒と教師の協働の営みは消し去ることはできない。教育弾圧反対運動の中で発せられた生徒たちのメッセージのほんの一部分ではあるが、彼ら生徒たちの証言を記録に残すことにより、松本壽男教育長、小林管理部長、北村春江教育委員長（現市長）らによって行われた教育改悪は永遠に批判し続けられることになるだろう。

おとんの分まで生きる

（一三回卒業生　M・T）

中卒労働者として働く

僕は、中学を卒業してから、中卒として、働くことになった。僕の兄貴たちも、中学を卒業してすぐ働いていたので、中卒で働いても別に不思議でないように思っていた。僕は、就職先を決める時、何処かの会社の載っているノートから選べという感じで、どこでもあんまりかわらへんわと思い、かまぼこを製造する会社に行く事になった。入社してから一週間ほど僕を含めて6人の中卒の人々が、部屋でいろいろな会社の話や来客に対する応対の方法を教えられた。その後、かまぼこのすり身を機械の中に入れ、かまぼこの形を作る作業に僕を含めて三人の男子がまわされた。

朝8時出社で、9時頃までは、雑用をしてそれからかまぼこの形をつくる作業をしていた。その作業には、冷たい水を使わなければいけなくて、まだ四月くらいだったのでわりと冷めたく、湯をいつもくみにいっていた。3時頃まで、すり身を機械の中に入れる仕事は、単純でおもしろくなく、友達もいないし、やる気がなくなってきた。

こんな気持ちがつまってくると、会社もよく休むようになり、ぜんぜんいかなくなりやめてしまった。

今度は、友達の紹介でガソリンスタンドの従業員になることになった。僕は、そこに入社を決められる前、かんたんな試験をするからといわれて、事務所のような所につれていかれ、紙と鉛筆をわたされて数字を1から10までかいてみといわれた。何となくバカにされたようで、なんぼ中卒やからいうてこんなことまでせんでええんとちがうかと思い情けなく思った。そこのガソリンスタンドに勤務してからなるべくまじめにつとめて、前の会社のようにやめんとこうと思って頑張った。現金でガソリンを入れるお客のややこしい計算も、まちがわんとこうと、できるだけ早く、ちゃんとやった。車のワックスがけや洗車もていねいにしたし、客が来ない時は、スタンドの掃除もした。でもこの会社の人はみんな年が僕と開いていたので、話すこともあんまりなく、いつも僕は、みんな従業員のいる所の部屋から出て、客の来るのを他の所でまっていた。そこの仕事のパンク修理やオイル交換などおぼえても、やっぱりむずかしいところもあって立っていると、一緒に働いている先輩なんかが、なんとかかんとか言い、いやなことを言われた。だんだんいやなことを考えるようになり、働きにくいのがいやになってしまい、やめてしまった。

それから僕は、しばらく働きもせずに家でブラブラ遊んでいた。しばらく遊んでいると、おやじが僕に仕事口があるから働かへんかと言った。そして僕はまた働くようになった。

今度の仕事は、マーケットのゴミを集めてそれを捨てにいく仕事だった。朝から昼まではマーケットのダンボールを集める仕事でたいしたことはなかったが、昼からゴミを集めるのはしんどかった。ざんぱんの汁が口の中に入ったり、キャベツのくさった臭いのは気分が悪かった。またそのゴミを焼却場に持っていって、火の燃えているカマの中に放り込む仕事はきつかった。まっ黒な煙が目にふれると、涙が出てきて目が痛くてたまらないし、その煙で息をすることもできなかった。ゴミをすてて、焼却場から出てくる時は頭や顔はすすだらけで、つばを吐くと真っ黒だった。こんな仕事なので、服装はボロボロを着ていた。そのかっこうで街の中をまわるのだから、友達なんかに会うのがはじめのうちはイヤだった。そこの仕事を3ヶ月ほど勤めていると、中学の時の教師が、僕の所にきて、高校に行かへんかといった。

一年遅れで市芦高校へ

僕はその時、この仕事は休みが木曜日で、日曜日も仕事で車で走りまわっている途中、友達が遊んでいるのを見ると僕も一緒に遊びたいと思っていたので、みんなと一緒に遊べるし、僕のうける市芦は遊べる学校やと聞いていたので、三年間遊びながら市芦で過ごそ

うと思った。入学試験をうける前にいちおう中学の時の先生が、かんたんな勉強をちょっと教えてくれた。こんなくらいの勉強で入学できるかなあと思っていて心配だったが、落ちてもともとや、落ちたら前の所で働いたらええんやと思っていた。

僕は市芦に行かへんかといわれた時、おふくろに「いいか？」と聞いてみた。すると、おふくろの返事は「別にええけど」と言ったが、なんとなく返事は重たいように思った。僕は働いている時、家が借金だらけだから、自分のもらった給料のいくらかは家に入れてたが、入学したら三年間は家に金を入れることもできないし、また家からお金をもらうことになってしまう。結局よけいに家を苦しくさせてしまうようになるからおふくろの返事はおもたかったんやと思った。

市芦の入試もおわって、発表の日、僕は合格していたので大変うれしかった。別に市芦に入って遊べると思ったからうれしかったんではなくて、高校に入れた、まだうちの兄貴たちが行ったことのない高校にはいれたからうれしかった。僕は家にかえってからおふくろの勤め先に電話をして、「とおったで」とおふくろに言った。僕のすぐ上の兄貴は仕事から帰ってくるとすぐに「どうやった」と僕に聞いた。僕は「とおったで」と言うと、「よかったな」と言ってくれた。

市芦に入学して、授業をするようになると、僕はよく授業をさぼって遊びまわっていた。クラスメートはみんな僕より一つ年が下で、話も合わんみたいやし、何となく変な目でみられているような気もした。しばらくあんまり授業も出んまま遊んでいると、金もないし、遊んどってもしゃあないからまた働こうかなあと思った。だからおふくろに、「学校やめて働こうかなあ」と言った。するとおふくろは、また重たい返事だったし、そばで聞いていた兄貴もイヤな顔した。僕は、兄弟の中で僕だけ高校に、金を家にいれなあかんのにいかしてもらっとんのやから、退学せんと、もう遊びながらでも単位さえとって、いちおう卒業証書をもらうまでおろうと思った。

はじめの学校の授業はなんとなくやっていたが、たんだん、授業でわからんところがあるときいていくようになり、質問もしていくようになった。このクラスの人間にもなんとなくなじみにくかったが、オートバイの話やなんかで、クラスにもうちとけていけるようになっていった。

こいつなに言うとんねん

一年にはいってまもない時、担任の先生たちに、「お前の生い立ち書け」とか言われていたが、僕はいつも先生にさからって、「なんでそんなんかかなあかんねん」と思っていた。ホームルームでも、クラスの者が自分の生い立ちをしゃべったりしていたが、「よう自分の事や家の恥をさらすわ。なんであんなんいうねん」と思っていた。そして今度は「お前は、お前のおやじの見方おかしいんとちがうか」と言われるようになった。僕は、「こいつなに言うとんねん」と思った。「先生なんかうちのおやじのこと何も知らんのに、何ええかげんなこというねん」と思った。

僕のおやじは、昔から年中酒を飲んでいた。飲むだけならいいのだが、飲むたびに、おやじの勤め先の主人に言われた文句がはがいいといってぐちをこぼし、借金の払いが苦しいからとおふくろが言うと、すぐうるさいといって、おちゃわんを投げたりするほどのおやじだった。僕はこんなおやじがはがゆかったから、よくなぐりあいのけんかもした。またおやじは仕事の休みの日になると、家に金もないのにおふくろに金を出せといい、おふくろが今月の月賦の支払いと借金を払うお金しかないというと、僕やおふくろなどにあたりちらし、おふくろがしぶしぶ出した金を持って競輪、競馬、競艇に行っていた。

僕は、生まれた時からこんなおやじをずっとみてきた。僕がまだ小学校の時、おやじは晩になると、おふくろにパチンコにいくから金を出せといっていた。おふくろが「そんなお金なんかあるわけないやないの。ごはんの用意のお金しかない」と言うと、僕らがたべているごはんを放り投げ、ふとんをしいてふてねをした。おふくろはそのちらかったおちゃわんなんかを泣きもってかたづけていた。こんなことをくり返すので、おふくろはたまりかね

て、僕の手を引いて毛布一枚だけ持ち、夜中に家を出ていった。お金もないし、行くあてもないので、芦屋の浜の辺でブラブラしていた。おふくろはあんまりしゃべらず、ただ歩いていた。しばらくしてもう夜中の三時ぐらいになると、おふくろは、「M、帰ろか」といって、帰った。

親父の懐へかえる

こんなんを見てきて、僕はおやじがものすごく嫌いだった。一年生の終わり頃、僕が学校から帰ってくるとおやじが、ふとんの中で震えていた。僕が「おとんどなんしてん」と聞くと、「血を吐いた」と言った。そして、おやじの布団をめくると、何も着ていなかったので、タンスから下着を出し着せたあと、便所についてみるとそこは血だらけだった。はじめは話をすることができたおやじだったが、時間が経つにつれて話すこともできなくなっていた。そしてただ時々、苦しそうに手をふり回わしたり、首を振ったり、体を動かしまわったりしていた。僕は、そんなおやじを見てふるえて、「おとうちゃん、だいじょうぶか」としか言えなかったが、おやじが時々静かにねむる時、「おやじ、何しに生まれてきたんやろうか。本当に好きなことばっかりやってきたんやろうか」と思うようになった。

生活史を見直す

その晩、おやじが死んでしまってから、僕は車で僕のすぐ上の兄貴と一緒に、近くに住んでいる親せきをむかえにいった。そのむかえに行く途中兄貴が僕に、「おいM、おかんの前では絶対泣くなよ」といった。僕はそれを聞いて、兄貴は兄貴なりにちゃんと家のことも考えていて、僕のように表だけみて本当に家のことを考えていない奴とはちがうと思った。僕のすぐ上の兄貴は、中学を卒業してから自動車の整備工として、中小企業で働いていた。しかしそこの先輩に、けられたりしていじめられたそうだ。それ以来兄貴は勤め先を何回もかえたが、家が苦しいので絶対給料のいくらかは家に入れていたようだ。家でもあんまり文句もいわず、僕が晩ご飯のおかずにきらいなのが出ると、こんなんくえるかいと文句を言っていたが、兄貴は何も言わなかった。

僕は、それからおやじの事を考えていくようになっていった。クラスメートが、ホーム・ルームで話すことで、おやじの見方おかしいんとちがうかというようなことや、先生の話で考えていくようになった。

おやじは、両親ともわりと早く死にわかれたらしかった。終戦後、おふくろと一緒になってから、戦争で焼けた家の跡を堀りおこして、金目の物を集め、それを売る生活をしていたそうだ。だんだんそんな仕事がなくなってくると、おやじが死ぬ前まで働いていた店に勤めるようになった。そこの店は、くずやが買ってきた新聞、雑誌を買い集めるような仕事をしていたが、しばらくすると、芦有道路の上の方にある家のゴミ取りもやらされていた。おやじが勤めはじめた頃は、おやじ一人の働きでは生活が出来なかったので、おふくろは、そこのおやじが勤めている店の下のくずやとなって働きに出ていたそうだ。それでもはじめは、生活が苦しく、おやじのつとめている店に借金が出来ていったそうである。そんな中でおやじは、ぜんぜん生活も楽にならないし、借金も払うことができず、やりきれなくなってきたんとちがうかと思う。そして持っていくところのないはがいさを酒とかけごとに向けて、ない金を持っていってでも遊ぼうとしたんとちがうやろうかと思った。僕の上の兄貴も、おやじが酒飲んでぐちこぼしたり暴れたりするのをみて、家をあけるようになり、帰らんようになっていったんとちがうかと思うようになった。（中略）

僕は、もっとおやじの見方をはっきりさせていかなあかんとちがうか、それに僕の上の上の兄貴が家のステレオなんかだまってもって行って売ったり、友達の車を借りて事故して、その借金を家のおやじやおふくろや、兄貴なんかに払わすこともなんでそんなんするようになっていったんかもっと考えなあかんと思った。（中略）

高卒就職者としての再出発

三年生になってから今度は、就職の問題の話しをぼちぼちしていくようになった。僕は、はじめ就職するのだったら、楽なところで大企業のようなきゅうくつな所にはいかず、中小企業のような所の運送屋の配達のような仕事につきたかった。配達だったら仕事はずっと外回りで気がらくだし、一日中机かなんかにすわりっぱなしで外に出ることのない、うっとおしい仕事をせんですむと思ったからだ。

クラスの話し合いや就職生の話し合いの中で、他の生徒たちが「大企業のような会社に就職したら、一生安定した仕事につけるし、両親も安心してくれる、そして家の中にもちゃんとしたお金を入れることができる」というような話しをしていた。僕はその話をきき、または先生からの話をきいて、ちゃんとした立派な会社に就職せんとあかんのかなあと思っていた。僕は家のおふくろに就職の話をした時、おふくろはやっぱり就職するんやったら大きな会社で、安定した生活ができるような所の方がええし、兄貴達がみんな中小企業のような所につとめているので、せめて僕だけにはちゃんとした会社にはいれるチャンスがあるのやから、そっちの方がええんとちがうかというようなことを言った。だから僕は、ちゃんとした会社にはいって安定した仕事につき、おふくろを安心させて、家にもお金を入れていかんのんとちがうかと考え直すようになった。

僕は、以前週に一回くらいの割合いで学校を休んで、アルバイトにいっていた。そのアルバイトに行くと、一日分の日給をその日にくれるというバイトだった。家はその時おやじはもういなかった。おふくろが毎日のご飯代をかせぐ生活をやっていたので、僕はそのアルバイトのお金をおふくろにわたしていた。おふくろはそのお金をうけると、僕にありがとうとか、わるいなあとかいっていた。僕はこのおふくろの礼のことばをきいてすこしええかっこうしていたようだった。

僕のおふくろは、学校も弟や妹の子守りや畑の仕事などでろくに行けなくて、おやじと結婚してから十年ちょっとは、くず屋をして働きにいって、僕らのごはん代をかせいでくれた。その後も、家政婦として休日以外は、血圧の高いのもがまんして、毎日といっていいほど働き続けている。僕は、そんなおふくろに対して、一日のアルバイトの給料ぐらい入れて、ええかっこうをしていたように思う。だから僕は就職してからは、家にお金を入れることは、家の生活を助けることではなくて、一緒に住んでいる僕も家を支える一人として、家にお金を入れてやっていかなあかんと思う。

僕は、就職先を、N社に決めた。それは、そこの仕事につくようになっても、安心して働けるし、おふくろもちゃんとした会社にはいったことで、安心することができると思う。僕はこの企業で、今まで市芦でやってきたことがうそにならんように、やっていかなあかんと思う。だから中卒で働いた時のようにつとめ先を何回もかえ、遊んでみたりして、家に迷惑をかけんようにして、頑張っていかなあかんと思う。（一九七七年三月）

（このTが一九八六年の市芦教育弾圧に対して、以下の抗議表明を行っている。）

市芦を否定されることは、今の僕の生き方自体も否定されること

一三回卒業生M・T

集会の日、仕事の都合もあって少し遅れて一番後ろで話を聞くことになりました。部落研の卒業生、朝文研の卒業生の話を聞いていると、自分はどういう立場の市芦生だったのかと思い返しました。

自分が育った家は、父親は酒乱で母親が働かないと食べていけない状態が毎日続く家庭でした。宮小、精中の時、勉強ができないまま授業が進み完璧な落ちこぼれでいました。中卒で就職しましたが、すぐやめてしまい職を転々としました。その頃、元精中の担任の先生が市芦の入試を受けることをすすめ、市芦に入ることができました。

市芦での担任は深沢先生でした。クラスに

は朝文研、部落研の生徒がおりホームルームでは自分達の生い立ちを生徒皆に話していた。僕は何で自分の生い立ちを他の人間にいうんや、恥しいことやのにと思っていました。しかし、ホームルームでの皆の話は、自分のこれからの人生の方向をはっきりさせるためのもので、必死で訴えていました。僕も徐々に話に入っていき、自分の生い立ちを話すようになりました。自分がこれから大人になってやっていかかなければならない事の基礎を教えてもらいました。

　また、市芦の先生には死んだ父親が残し早く返さなければならない借金の返済のために、いろいろ走り廻って頂きました。ただの先生と生徒の関係なのに、ここまでしてくれる学校はなかなかありません。今、市芦を卒業し就職をして頑張って生きていられるのは、市芦の先生方のお陰です。生徒一人ひとりの事を考えてくれる市芦を、ごく一部の人間によって壊されることは、僕たちが市芦で教えてもらった事全てを否定されるものであり、今の僕の生き方自体も否定されるものであります。

　これまで、一生懸命やってこられた市芦の先生方に対しての弾圧は、絶対にはね返さなければなりません。

地域に深くつながり、教育の底辺を支えた高校が次々とつぶされる。市芦存続運動の周辺には同じ状況と同じ闘いがある。

［神戸の夜間高校を守る会ニュースより］

神戸市教育委員会に一三、〇〇〇名の「統廃合反対」怒りの署名を提出！

　五月一一日、「守る会」は神戸市教委と交渉をもち、約一万三千名の「神戸の夜間高校を守るための署名」を提出した。山口代表代行は、「私たち卒業生や親、教師などが街頭に立ち、走り回って集めた署名です。この重みを真剣に受け止めてほしい。」と訴えた。

　この日の交渉は今年四月に発足した「新構想高校推進室」が相手で、楠高校前校長も推進室の中心人物の一人として交渉に出席していた。

　私たちは、「長田工業高校は数十年の歴史を持ち、地域に密着してきた。地元の人も事前に移転の話を聞かされてなく、駅前での私たちの署名活動で初めて聞き驚いていた。夜間高校は、職場・家庭・学校が地元に密着し、長田の文化の一つを担っている。財政的な理由だけでつぶされるのは絶対許されない。」

　「今、若い子どもたちが命を大事に思わず、平気で人を殺したり、自殺したりする世の中になっている。こういう子たちに命の尊さ、家族や友達とのつながりを教えていける

のが、夜間高校のよさだと思う。このような場所をなくしたりせず、守っていくことが神戸市が栄えていくことにつながる。計画についてぜひ見直してほしい。」と訴えた。

統廃合と同時に「在籍生徒をむりやり新設高校に移動」に怒りが爆発！

　この交渉でとりわけ私たちの怒りが爆発したのは、市教委が「平成一六年に新工業高校が出来たら、同時に四つの学校（うち二つは定時制の長田工業・御影工業）の生徒全員、新しい学校に移ってもらう」と発言したときだった。県立学校ですら、夜間高校生の通学の困難さを考えて、万一統廃合しても夜間高校にいる生徒について、最短年限で卒業するまではその学校にそのままいられるよう、最低限の配慮をしている。私たちが「夜間高校の生徒は、急に学校に合わせて仕事を変えたり、生活を変えたり出来ないのを知っているのか」と問いかけると、「今年の入学者には『募集要項』に（移転の事を）書いてあるので問題ない」と答え、「そんな大事なことを、紙に一行書いてあるからOKだというのは、インチキと同じだ。なぜ卒業までその学校で勉強できないのか」と追及すると「学校の教員や施設の維持費が余分にかかるし、（学校）跡地の利用もある」と答え、二つの夜間高校を売り飛ばして資金を捻出しようという計画の狙いを改めて暴露し、参加者の怒りをかっていた。（中略）

楠高校・摩耶兵庫高校の将来の統廃合の可能性も残した市教委

　市教委は私たちに対し「定時制の値打ちはわかるが、計画は変更できない」と繰り返し答え、その上で「新構想高校推進室は、今回の工業高校の再編計画だけでなく、将来の全日制・定時制高校のあり方全般について議論する場所である」と述べ、「それでは将来、楠高校や摩耶兵庫高校の普通科二校についても統廃合するのか」との質問にも「すべて白紙の状態から検討します」と述べ、県が計画を進めている神戸市内での単位制高校設置と夜間高校の大幅な統廃合計画に便乗して、神戸市もさらに夜間高校をつぶす可能性について示唆した。

今後も息の長いたたかいに

　市教委は今後、「新構想高校推進室」で、夜間高校の入学者数や県の計画の動向を見ながら、あらたな夜間高校つぶしを視野に入れた計画作りをねらっている。

　この日の交渉の最後に卒業生から「夜間高校の値打ちは何だと思いますか？」との質問が市教委のメンバーに投げかけられた。この問いは、「夜間高校の値打ちをどれだけ知っていますか」という問いでもある。

　私たちは、これからも夜間高校を守るために、そして夜間高校の必要性を訴えていくために、さまざまな活動を続けていかなければなりません。息の長いたたかいになりますが、皆さんのご協力をよろしくお願いします。

「長田工業高校を存続させる会」が発足、署名活動を開始！

　今回の計画の対象校である長田工業高校で、「定時制単独校（長田工業高校）を存続させる会」が、卒業生などを中心として発足、廃校に反対し存続を求める署名活動の取り組みを開始しました。

　長田工業高校は現在、生徒の九割が長田区より西から通学しており、明石をはじめ遠く淡路島や加古川などからも毎日通っているとのことです。市教委はこのような生徒の実態を隠し、強引に新しい学校へ行けとばかりに統廃合を推し進めています。生徒に合ったきめ細かな教育を行うためにも、独立校舎を持ち単独校である長田工業高校の利点を生かし、存続させることが必要であると訴えています。

　今後の同会の取り組みに対し、私たちも共に存続を求めてたたかっていきます。

市芦が財政難を理由の一つとしてつぶされようとしている。この財政難は土木事業優先の北村芦屋市政がつくり出したものである。この土木事業が利権汚職にまみれていた。市芦廃校を推進した議員と市幹部が汚染されていた。この汚染はどこまで広がっているのか。北村春江市長は追求終結に躍起だ。初公判があった。

[芦屋市汚職事件初公判傍聴記]

金で汚染された北村市長の側近たち

M生

六月二二日神戸地裁で芦屋市発注の震災復興事業をめぐる汚職事件の初公判があった。午後2時から開かれるということにもかかわらず、午後1時30分には既に100人以上の傍聴希望者があり、90席の傍聴席のために券が配布されることとなった。

公判が始まる前、少し時間あったので、ロビーで一服していると、黒いスーツ姿の眼鏡をかけた男性がトイレへ、しばらくすると、また、同じ男性がセカセカとトイレへ。確かに、その顔に見覚えが。新聞でよく見た富田元助役ではないか。ご本人にお目にかかるのは、初めて。確かに、富田である。

そして、公判が始まる寸前に、再度トイレへ。よほど緊張していたのか、はたまた、罪状認否で言うことをトイレの中で復唱でもしていたのか。そこへ、担当の弁護士が、彼を捜しにロビーへ。トイレから出てきた彼と出会うと、富田の手を取るようにして、一〇一号法廷へ入っていった。まるで嫌がる子どもを病院へでもと言うところか。こんな様子に、「マダムキラートミタ」と呼ばれたころの面影はみられない。

公判での罪状認否では、富田被告らは起訴事実を全面的に認めた。さらに検察の冒頭陳述の中で与党最大会派を構成していた二人の市議(畑中・長谷)の関与も明らかとなった。百条委員会では、証言拒否で臨むこの二人の市議の、汚職事件を市民の前に明らかにしようという態度は再度、調査特別委員会で徹底的に追及されなければならない。

また、震災復興事業の一環として位置づけられた(実は震災復興と関係がない)、南芦屋浜総合運動公園は「建設省がキャリアの力を誇示するためにおぜん立てした持参金(借金)」で建設されようしている。これも利息を含め約150億円の返済を伴う事業、芦屋市の財政難の源である。富田元助役のした借金が、市芦高校の廃校理由となることは絶対許せない。このさい、即刻この事業は凍結すべきである。

さらに、富田元助役がその起訴事実を認めた以上、北村市長の監督責任は免れない。己で課した三ヶ月五〇%の減給などとんでもなく軽い処分であり、このような処分で許されるはずがない。「今後の信頼回復と再発防止は」北村市長あなたに取り組んでもらう必要はもうない。

今後の日程

市教委は解決すべき課題を置き去りにしたまま、森教育委員長の独断発言に沿って、九月中にも市芦廃校スケジュールを策定しようとしています。市芦への進学を希望している生徒たちに公立高校の門戸を開放するために、市芦高校存続をめざしてもう一踏ん張りしたいと思います。

以下の日程で「市芦があって何が悪いねん！市民の会」の取り組みが予定されています。皆さんの参加・協力をお願いします。

九月七日　街頭署名と街頭宣伝
午後五時～七時
ＪＲ芦屋駅周辺

九月九日　「市芦があって何が悪いねん！市民集会」
午後二時～四時
芦屋市民センター四〇一号室